

特に(4)のような例に関して、補文を取る *katakan* 「言う」などの動詞は *di-V=nya* 型では補文が表す内容に、BP 型では行為に焦点が当たることが指摘されている(Kaswanti Purwo 1988: 206)。つまり補文をとる動詞が *di-V=nya* 型で使われた場合、知覚内容・発言内容を強調する機能を持つと言える。

本発表は、以上を鑑みて使役動詞について考察を行う。ここで使役動詞を調査とした理由は先行研究に以下の2つの問題があるためである。第一に、先行研究ではそれぞれの説明が一つの動詞に限定されている。*lihat* 「見る」、*katakan* 「言う」などの補文をとる動詞は前述のように *di-V=nya* 型に補文が後続するという共通項を見出すことが出来る。しかし *buat* における結びつきは、それが動詞単体に紐づけられたものであるか、使役動詞一般に言える傾向であるかという点が議論されていない。そのため *buat* のような使役動詞にも一定のパターンが存在するかどうか調べる必要がある。第二に、先行研究では結びつきの要因を検討していない。特に二つの型に現れる3人称代名詞形の違いは重要な点である。先行研究で扱われた例は主に有生物を動作主にもつものであった。しかしこれらの代名詞が所有表現に用いられる場合、*=nya* は有生物と無生物の両方を指示対象にとるが、代名詞 *dia/ia/mereka* は基本的に有生物のみを指すという違いがある(Sneddon et al. 2010: 172)。そのため、受身表現における動作主項として現れる場合にもそうした違いが反映されて然るべきである。そこで、以下の(5)のように無生物主語を取りやすい使役動詞を調査することによって代名詞の差異が型の使用に与える影響を考察する。

(5) *Memenangkan pertandingan seperti itu, [...], mem-buat saya me-rasa tetap positif dan percaya diri.*

ACT.win match like this ACT-make 1SG ACT-feel still positive and believe REFL
「このような試合に勝つことは私を絶えずポジティブにし、自信をつけさせてくれる」

(<https://www.ligaolahraga.com/tenis/bagi-nadal-petenis-tak-bisa-berada-di-final-french-open-tanpa-menderita>)

本発表の構成は大きく二つに分かれる。第一に *buat* をはじめとする使役動詞が受動態形式に対して同じ選好性を持つかを調査する。ただし最初に *buat* と受動態形式の対応関係を再考する。これは Shiohara, Sakon & Nomoto (2019) では、*buat* について主節のみを調査しており、関係節の場合を対象としていなかったためである。その後その他の使役動詞の *di-V=nya* 型と BP 型の使用を定量的に調査する。第二にコーパス内の用例を、代名詞の指示対象に焦点を当てて観察し、両形式の交替可能性を検討する。結果として以下の二点を主張する。

(A) *di-V=nya* が使役の *buat* と結びつくのではなく、「作る」の *buat* は両方の型を選択する一方、使役の *buat* は *di-V=nya* 型を選好すると捉えるべきである。この選好性はインドネシア語の使役動詞に共通する特徴である。

(B) *di-V=nya* 型は BP 型と異なり代名詞が無生物・出来事を指すことが出来る、そのため無生物・出来事が原因項に来やすい使役の *buat* で *di-V=nya* 型の頻度が高くなる。しかし他の動詞にはこの説明を適用できず、*buat* からの類推によって選好性が生じたと主張する。

2. 調査方法

調査はウェブコーパスである Leipzig Corpora Collection (Goldhahn, Eckhart & Quasthoff 2012)内の4つのコーパス(Mixed-tufs4, Web-tufs13, Newscrawl-tufs6, Wikipedia-tufs14)を用いて行った。前者二つはジャンルを問わないウェブ上のブログなどの記事、Newscrawl-tufs6 はニュース記事、Wikipedia-tufs14 はウィキペディアの記事から収集されており、各100万文からなる。調査対象となる語は *buat* の他に、代表的使役動詞である *paksa* 「強いる」、*suruh* 「命じる」、*biarkan* 「許す」、*minta* 「頼む」とした。これらはその強制力の強さによって区別される。また *paksa*, *biarkan*, *minta* については「Xを強制する」、「Xを放っておく」、「Xを求める」という二項動詞としての用法も存在する。一例として(6)に *minta* の用法を挙げる。

(6) a. *Dia me-minta saya pulang.*

3SG ACT-ask 1SG go.home

「彼は私に帰るよう頼んだ」

b. *Dia me-minta tiket kelas bisnis.*

3SG ACT-ask ticket class business

「彼はビジネスクラスのチケットを求めた」 (作例)

そしてそれぞれの動詞の”*di-V=nya*”及び”*dia* [3SG] / *ia* [3SG] / *mereka* [3PL] *V*”という形式をテキストファイ

ルから抽出し、生起している節の種類および動詞の意味(使役/非使役)のタグ付けを行った。

ただし節の種類についてはすべてを機械的に区別できるわけではない。まず di-V=nya 型については以下のように=nya が名詞化標識として用いられる場合があり、このような用例は対象から除外する。

- (7) Reecalisasi [di-buat=nya kereta api super cepat]_{NP} dapat segera terwujud.
 realization PASS-make=NMLZ train fire super fast can soon realized
 「超高速列車の制作の実現はすぐに現実のものになるだろう」

次に BP 型について述べる。(1a)のような能動態標識の meN-は文体や動詞に応じて省略される場合もあり、その場合 BP 型と同一の形式となり区別がつかない。そのため抽出した文から能動文を除外する必要性が生じる。客観的な指標として否定辞・助動詞の生起位置がある。BP 型では動作主を表す代名詞と動詞は必ず隣接しなければならない。そのため否定辞・助動詞が動作主を表す代名詞の前にあれば BP 型、代名詞と動詞の間にあれば能動文となる。(8a)は BP 型、(8b)が能動文である(cf. Nomoto 2020: 3)。

- (8) a. Sejak 2001 ratusan juta rupiah sudah dia habiskan.
 since 2001 hundreds million rupiah already 3SG finish
 「2001 年から数億ルピアものお金は彼が使った」

- b. Sejak 2001 ratusan juta rupiah dia sudah habiskan.
 since 2001 hundreds million rupiah 3SG already finish
 「2001 年から彼は数億ルピアものお金を使った」

しかしこのような否定辞・助動詞がない場合は、被動作主項の定性、それぞれの動詞の書き言葉での能動態標識 meN-の有無の許容度から例文を一つ一つ判断する必要がある³。

3. 調査結果

調査対象数は表 1-2 のようになる。本節では buat とそれ以外の使役動詞の順に調査結果をみる。表 3 は buat についての結果である。

表 1 di-V=nya 型の調査対象の数

	buat	paksa	suruh	biarkan	minta
All	727	21	66	51	78
その他	113	5	0	2	2
Target	614	16	66	49	76

表 2 BP 型の調査対象の数

	buat	paksa	suruh	biarkan	minta
All	386	15	25	26	719
その他	40	8	162	12	625
Target	346	7	9	14	94

表 3 buat の受動態形式

	関係節			主節			All
	「作る」	使役	Total	「作る」	使役	Total	
di-buat=nya	379	15	394	57	163	220	614
BP	308	0	308	33	5	38	346
Total	687	15	702	90	168	258	960

表 3 を見ると、主節においても関係節においても使役用法の buat はほぼすべての場合 di-V=nya 型で現れている。しかし関係節ではむしろ「作る」としての buat が di-V=nya 型の 95%を占めているため di-V=nya 型が使役の buat と結びついているとは言えない。そこで形式と意味が一对一で結びついているというよりも、用法によって形式への選好性が異なると捉えるべきであることを主張する。具体的には、「作る」として buat を用いる場合は di-V=nya 型と BP 型の両方の可能性があるが、使役動詞として用いる場合は di-V=nya 型で現れる(図 1)。

³ 詳しくは Cole, Herman & Tjung (2006: 67), Cumming (1991: 39), Kaswanti Purwo (1988: 199)を参照。なおこれらの指標は完全に客観的とは言えないが、近似値を得るための選択であり、傾向を知るためには問題ないとする。

図 1: buat における用法ごとの受動態形式選択



次にその他の使役動詞の結果を確認する。表 4-6 は主節・関係節を合わせた、各動詞の用法ごとの受動態形式の生起数である。

表 4 paksa の受動態形式

	二項	使役	
di-V=nya	2	14	16
BP	4	3	7
Total	6	17	23

表 5 biarkan の受動態形式

	二項	使役	
di-V=nya	6	43	49
BP	5	9	14
Total	11	52	63

表 6 minta の受動態形式

	二項	使役	
di-V=nya	36	40	76
BP	85	9	94
Total	121	49	170

すべての動詞の使役用法において、di-V=nya 型の選択が 8 割以上を占めている。一方で二項動詞としての用法の場合はそのような偏りは見られない。

表 7 suruh の受動態形式

	使役
di-V=nya	66
BP	9
Total	75

最後に suruh を見る。suruh は他の動詞とは異なり二項動詞としての用法は確認できないため、使役用法のみの調査となる。ここでも di-V=nya 型への偏りが確認できる。つまり、調査対象のすべて動詞の使役用法において di-V=nya 型への偏りが見られた。以上から次のように結論付けられる。第一に、di-V=nya 型が使役の buat と結びついているのではなく、各用法が異なる構造的選好性を持っている。第二に、こうした使役用法の構造的選好性は他の動詞でも見られるような一般的傾向である。

4. 選好性の要因

前節ではインドネシア語における使役用法が di-V=nya 型への選好性を持つことを見た。本節ではこうした選好性が存在する要因を代名詞の指示対象という点から考察する。まず BP 型についてコーパス内では三人称代名詞が有生物を指した例のみが確認された。

(10) Dalam Quran **dia buat** Allah ciptaan=nya untuk menyetujui kejahatan tersebut.

in Quran 3SG make Allah made.up=3 to ACT.agree misdeed that

「コーランで彼(=ムハンマド)は創造したアッラーにその悪行を認めさせた」

一方で=nya は有生物(11)の他にも、無生物を指す例が多数存在する。(12)では=nya は virus ini 「このウイルス」を指している。

(11) [Gajah]_i terus meng-ganggu kebun masyarakat, bahkan ada rumah masyarakat yang elephant continuously ACT-disturb farm people contrary exist house people REL runtuh **di-buat**=[nya]_i.

collapse PASS-make=3

「象は引き続いて民衆の農園を荒らし、家を壊されたものまでいた」

(12) Dan jika [virus ini] sudah sangat parah, kita 'pingsan' **di-buat**=[nya]_i.

and if virus this already very terrible 1SG.INC faint PASS-make=3

「そしてもしこのウイルスがひどくなってしまうたら、我々は気絶させられてしまう」

さらに di-V=nya 型における代名詞=nya は無生物の他に、出来事や行為を参照することが出来る。次の

例では=nya は「夢想すること」という行為を指している。

- (13) Anda memang [akan banyak me-lamun],
 2SG really will many ACT-imagine
 tetapi jangan sampai terlalu lama karena Anda bisa gila **di-buat=nya**.
 but don't to too long because 2SG can crazy PASS-make-3
 「あなたは本当にたくさん夢想するだろう。しかしおかしくなってしまうかもしれないから、あまり長いこと(夢想を)してはいけない」

以上の例において交替可能性を検証してみると、有生物の場合は(11')のように BP 型で置き換えることが可能である。なお以下の例で runtuh 「崩壊する」など状態・行為を表す項が後置されているが、詳しくは後述する。

- (11') [Gajah]_i terus meng-ganggu kebun [...] ada rumah masyarakat yang [**dia**]_i **buat** runtuh.
 elephant continuously ACT-disturb farm exist house people REL 3SG make collapse

一方で無生物の場合は許容度が落ち、擬人化による解釈が必要となる。

- (12') ?Dan jika [virus ini]_i sudah sangat parah, kita [**dia**]_i **buat** 'pingsan'.
 and if virus this already very terrible 1PL.INC 3SG make faint

指示対象が事態の場合は BP 型で置き換えることは出来ない。

- (13') *Anda memang [akan banyak me-lamun]_i, [...] Anda [**dia**]_i bisa **buat** gila.
 2SG really will many ACT-imagine 2SG 3SG can make crazy

以上 di-V=nya 型と BP 型の代名詞に、表 8 のような指示対象の違いがあることが明らかとなった。

表 8 代名詞の指示対象

	有生物	無生物	出来事
di-V=nya 型	✓	✓	✓
BP 型	✓	×	×

さらに=nya が有生物を指していると考えられる場合でも、人の直接の働き掛けではなく、その人の行為によってその状況が生じたと解釈できる例が多くある。(14)では ia 「彼」が saya 「私」を能動的に驚かせたというよりも、首を振るという行為が驚くという感情の原因となったと解釈する方が自然である。

- (14) Kaget saya **di-buat=nya** ketika dengan cepat ia meng-geleng.
 surprised 1SG PASS-make=3 when with fast 3SG ACT-shake.head
 「彼がすぐに首を横に振ったとき、私はとても驚かされた」

これは前述の Kaswanti Purwo (1988) の議論を踏まえることで説明可能である。彼によれば katakan 「言う」について di-V=nya 型では発言内容に、BP 型では発言行為が強調される。これを buat に適用すれば、dibuatnya では使役行為よりも使役の結果の状態・行為が強調される、言い換えれば動作主が強い働きかけを行っていない場合にも使用される形式であるということが出来る。実際 BP 型では(8)のような直接の働き掛けを伴う例のみが観察された。

まとめると BP 型の代名詞 dia/ia/mereka は有生物のみを指すのに対し、di-V=nya 型の代名詞=nya は有生物に加えて、無生物・出来事を指すことが出来る。つまり、無生物・出来事が使役の原因となる場合に、両者は交替不可能である。そのため無生物・出来事を原因項にとりやすい使役の buat のような動詞では di-V=nya 型の割合が高くなったと考えられる。また積極的な働きかけを含意しない場合でも使用できるという点で dibuatnya は汎用性が高い。

最後に suruh/biarkan/paksa/minta の受動態の形式選択について考える。これらの動詞は主に人を主語にとり、また行為を通して他者に影響を与えることを意味するものではないため、これまでの議論から di-V=nya 型への選好性を説明することは難しい。そこで現段階では buat が高頻度で di-V=nya 型で共起す

るため、そこからの類推によって他の使役動詞でも同じ選好性が生じていると提案する。

このような類推はあるカテゴリーの中で、他に比べて十分頻度が高く、意味的により一般的な語が存在する場合に起こりやすいとされる(Bybee 2010: 88-89)。例えば Goldberg (2006)は母親が子供へ話しかけるモノログを収集したコーパス研究で、「主語+動詞+oblique」という構文に使われる動詞のうち 39%を go が占めることを報告した。そしてこうした頻度の高さと go が移動動詞の中で最も基本的な意味を持つことから、子供は go を中心に上記の構文を習得すると主張する。同様の議論が使役動詞でも可能である。頻度をみると、今回対象とした di-V=nya 型使役動詞のうちおよそ 54%を buat が占めている⁴。さらに buat は他の動詞に比べ強制力という点で中立的であり、基本的な使役動詞といえる。

また dibuatnya が話者の知識の中で定着している証拠に、dibuatnya には統語的逸脱性が見られる(cf. Hilpert 2014:14)。(11)をはじめとして dibuatnya は[主語+状態+dibuatnya]という語順をとることが出来る。これは元の能動態を想定した場合、状態項が動詞に前置されているという点で逸脱的である。(12)を例にとると、規範的な文法では(15b)のようになる(Sneddon et al. 2010: 268)。

- (15) a. Virus ini mem-buat kita pingsan. → b. Kita di-buat=nya pingsan.
virus this ACT-make 1PL.INC faint 1PL.INC PASS-make=3 faint
「このウイルスは我々を気絶させた」 「我々はこれに気絶させられた」 (作例)

実際、BP 型では[主語+状態+dia buat]という語順は取れず、有生物を指している場合でも非文となる(16)。(11)で語順が変化したのはこのためである。

- (16) a. Gajah mem-buat rumah masyarakat runtuh. → b. *Rumah masyarakat runtuh dia buat.
elephant ACT-make house people collapse house people collapse 3SG make
「象は民衆の家を壊した」 「(民衆の家は彼(=象)によって壊された)」

以上より、buat が高頻度かつ基本的意味をもつ動詞であるため、そこから「使役と di-V=nya 型」という結びつきが話者の中に定着し、そこから他の動詞へ拡張していったと推測できる。

5. 今後の課題

今後の課題として二点あげられる。第一に、調査範囲の拡大の必要性がある。本発表は先行研究を踏まえて使役動詞を調査したが、より説得力のある議論を行うためには範囲を限定せず調査を行うことが必要である。di-V=nya 型で現れるコーパス内の動詞をすべて抽出し、動詞の意味による分類や代名詞=nya の指示対象調査を行う必要がある。これによって本発表の主張が改めて支持される、ないしは別の要因が見つかる可能性がある。第二に能動文から受動文を作成してもらうなど、今回の結果を実験的に裏付ける必要がある。第三に、二項動詞としての用法の場合は両方の形式をとることが明らかとなったが、その使い分けの基準について調査を継続する必要がある。

略号一覧

1: first person, 2: second person, 3: third person, ACT: active-voice, INC: inclusive, NEG: negation, NMLZ: nominalizer, PASS: passive-voice, PL: plural, PTC: particle, REDUP: reduplication, REFL: reflexive, REL: relative, SG: singular

参考文献

- Arka, I Wayan & Christopher Manning. (1998). Voice and grammatical relations in Indonesian: A new perspective. In Miriam Butt & Tracy King (eds.), *Proceedings of the 1998 International Lexical Functional Grammar conference*. Stanford CA: CSLI Publications
- Bybee, Joan. (2010). *Language, Usage and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon & Yassir Tjung. (2006). Is there pasif semu in Jakarta Indonesian? *Oceanic Linguistics* 45(1). 64–90.

⁴ 当然調査で触れることのできなかった使役動詞は多く存在するが、今回対象とした語は頻度の高いものを優先して選出しているため、仮にここから対象を増やした場合でも数値は大きく変動しないと予想される。

- Cole, Peter, Gabriella Hermon & Yanti. (2008). Voice in Malay/Indonesian. *Lingua* 118(10): 1500–1553.
- Cumming, Susanna. (1991). *Functional Change: The Case of Malay Constituent Order*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Djenar, Dwi Noverini. (2018). Constituent order and information structure in Indonesian discourse. In Riesberg, Shiohara & Utsumi. (2018), 177-205.
- Goldhahn, Dirk, Thomas Eckart & Uwe Quasthoff. (2012). Building large monolingual dictionaries at the Leipzig Corpora Collection: From 100 to 200 languages. *Proceedings of the Eighth International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC'12)*.
- Goldberg, Adele E. (2006). *Constructions at Work: The nature of generalization in language*. Oxford: Oxford University Press.
- Hilpert, Martin. (2014). *Construction Grammar and Its Application to English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Kaswanti Purwo, Bambang. (1988). Voice in Indonesian: A discourse study. In Shibatani (1988), 195–241.
- Nomoto, Hiroki. (2020). Bare passive agent hierarchy. *Handout of the 27th annual meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association (AFLA 27)*.
- Riesberg, Sonja. (2014). *Symmetrical Voice and Linking in Western Austronesian Languages*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Riesberg, Sonja, Asako Shiohara & Atsuko Utsumi (eds.) (2018). *Perspectives on information structure in Austronesian Languages*. Berlin: Language Science Press.
- Shibatani, Masayoshi (ed.). (1988). *Passive and Voice*. Amsterdam: John Benjamins.
- Shiohara, Asako, Yuta Sakon & Hiroki Nomoto. (2019). Discourse functions of the two non-active voices in Indonesian: Based on the web corpus data in MALINDO Conc. In Nomoto Hiroki & David Muloejadi (eds.), *Linguistic studies using large annotated corpora, NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia* 67: 77–101.
- Sneddon, James Neil, K. Alexander Adelaar, Dwi N. Djenar & Michael Ewing (eds.). (2010). *Indonesian: A comprehensive grammar* (2nd edition). London: Routledge.
- Taylor, John R. (2012). *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press.